

になれば素晴らしいですね。

【校内研修推進課題の解決に向けて】

佐久間 今、先生方からご指摘ありましたような校内研修推進上の問題点や課題を解決していくために、どのような改善への努力をしていったらよいかということについて、それぞれのお立場からお話をお聞かせください。

まず、松崎先生、「教師の研修意欲」という点についてお話をください。



松崎和子先生

松崎 わたしは以前小教研の仕事をしていましたが、主題研修会や研究協議会に参加される先生方はさすがに研修意欲が旺盛です。

そのような先生方が、つまり、県レベルで勉強した方たちが、地区や学校の核になって活躍してレベルアップに努めてほしいと思います。

また、「好きこそものの上手なれ」と言われるように、自分の得意な教科、好きな教科を中心（核）として研究を進めることが先生方の特性を磨くためにもいいのではないのでしょうか。

佐久間 網代校長先生は、校長時代に新しい校

内研修の方向を求めて実践されてきたとお聞きしておりますが、先生の校内研修に寄せる思いをお聞かせください。

網代 まず研究テーマの設定に際しては、《学校教育課題の解決》と《教師個々の生涯をかけた発達課題の達成》という2つの要請に応えたいということです。前者の要請は当然ですね。後者については、個々の職員の関心・必要・能力のほか、年代のおよび校内・外の位置等の個性的な立場～つまりは発達課題～をテーマ設定に生かそうというのです。この側面はこれまであまり重視されなかったと思いますが…。

それは一見「個人研究」のようですがそうではありません。学校で最たる教育目標と見た『児童個々に自分を生かす姿を具現する』という一定方向の共通課題があり、それを達成するために、職員が個性的立場を生かしながら各自テーマを設定して研究を進めようとするのです。

研究は学校としての標準スケジュールに沿いながらも各自のペースで進めますが、もちろんその過程では公私を問わず交流と切磋琢磨があり、また研究の成果は紀要や発表会で公表され、学校経営や教育実践への「提言」として生かされます。ですから、そうした意味では共同研究の一態様といえるのではないかと思います。

自己評価になりますが、2年間の実践では多くの部分に成功要素がありました。一方、校長の意図が十分に機能しない部面もあり、また一人一研究の体制で研究が果たして深化できるのかとの疑問も提示されました。しかし、この試みは先ほど述べた校内研修の問題点の打開へ向けた一学校の選択であり、挑戦でもあります。

何よりも、学校一研究の進行に全員かぞろぞろと追随しての研究成果の大きさよりも、個々の職員が職種を超えて全員自ら研究を開発する